

東日本大震災の津波により、三八・上北地域の防災林であるクロマツ海岸林が被災し、約12畝が消失した。その後、塩害などにより枯死木が

未来を開く

青森産技センター報告

— 4 —

相次ぎ、約134畝の海岸林が枯損した。被災した海岸林の早期復旧には、大量のクロマツ苗を短期間で供給する必要がある。

津波被害の防災林

コンテナ苗で早期復旧



コンテナ苗の植栽

育成、植樹時間を短縮

この対応策の一環で「コンテナ苗」の活用が期待される。コンテナ苗とはマルチキャビティコンテナと呼ばれる特殊な容器で栽培した苗のこと

で、根鉢が円筒状の細長い形をしている。このため、プラグを差し込むように、小さな穴に素早く簡単に苗を植えることができる。植える季節も問

われない。さらに、従来の苗よりも生産密度が高く（従来は1平方メートルあたり16〜36本だが、コンテナ苗では177〜296

本）、育苗期間も半年以上短い。しかし、コンテナ苗の生産には施設整備のための初期投資が必要な上、従来より苗木作りに手間がかかるため、生産コストは高くなる。

林業研究所では、実用可能な技術の確立を目指して、クロマツコンテナ苗の生産試験と海岸林への植栽試験を実施

した。生産試験は苗木生産者と協力して行い、約1〜1.5年（通常は2〜2.25年）で出荷できることを確認。三沢市、おいらせ町の海岸林3カ所に春、夏、秋の3回に分けて、合計1789本のコンテナ苗を植えたところ、枯れたのはわずか5本だった。

また、植える作業時間も従来の方法に比べて100本当たり13分短縮でき、本県でもコンテナ苗の生産と利用が可能であることが確認された。

しかし、生産費は従来より約2.4倍高かったことから、コスト圧縮が課題として残っている。

沿岸住民の安心、安全な生活環境を早く取り戻すため、この技術を早急に実用レベルまで到達させるよう、日々研究を進めている。

（林業研究所森林環境部 伊藤昌明）

東奥日報 平成28年4月29日掲載

この記事は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。